

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 8 日現在

機関番号：11401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370228

研究課題名(和文) 1930年代日本の経済と地方・農村・満洲の文学における表象に関する研究

研究課題名(英文) How Economic phenomena, Region, Rural and Manchuria were represented on Japanese literature in 1930s

研究代表者

山崎 義光 (YAMAZAKI, Yoshimitsu)

秋田大学・教育文化学部・准教授

研究者番号：10311044

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、グローバル化する経済現象が、どのように表象されたかという観点から、1930年代の日本の文学を対象に研究をおこなった。従来、この時代は、プロレタリア文学派と芸術派の対立という観点、ナショナリズムと文学という観点で理解されてきた。しかし、経済現象が文学作品においてどのように表象されたかという観点にシフトさせることで、従来の文学史的な理解とは異なる新たな文学史的展望を開こうとした。加えて、「経済小説」として書かれた小説のなかで、経済問題がどのように描かれてきたかについて調査研究した。それによって、1930年代までの日本における金融リテラシーの普及状況の一端を明らかにした。

研究成果の概要(英文)： In this research, we studied Japanese literature in 1930s from the viewpoint of how globalizing economic phenomena was expressed. Traditionally, this age has been understood from the viewpoint of conflict over literary theory such as Proletarian school and Artistic school, Nationalism and Literature. On the other hand, In this study, by shifting Economic phenomena in terms of how it was represented in literary works, we tried to open a new literary historical perspective that is different from traditional literary historical understanding. In addition, we investigated how economic problems were drawn in novels written as "economic novel". we revealed a part of the spread of financial literacy in Japan by 1930s.

研究分野：人文学

キーワード：日本文学 経済学 経済小説 地方・農村 満洲 1930年代

## 1. 研究開始当初の背景

(1) テーマ設定の出発点は、20世紀の日本文学史を、従来とは異なる、どのような観点から捉え直せるかということにあった。従来、ナショナリズムや政治思想・運動との関連で捉えられることはあっても、広く大衆にまで影響をおよぼした経済変動という観点はあまりなかった。この観点により新たな文学史的展望を開くことにつながるのではないかということから構想した。

(2) 第一次世界大戦後、1920～30年代は、グローバル化した経済現象が小説の題材に取り入れられた時期にあたる。マルクス主義を理論的背景としたプロレタリア文学運動の出現がその象徴的な現れである。しかし、プロレタリア文学は「政治と文学」という枠組みで運動が展開し、経済小説とは見なされなかった。この時代は、従来、プロレタリア文学派、芸術派等の対立として捉えられてきたが、両派に共通する、文学における経済現象の表象という観点にシフトさせることで、新たな文学史的展望を開くことができると考えた。

(3) 文学には社会的な種々相が題材として含まれ、社会的な関心に応える意義もある。近代的な資本主義・金融の仕組みが明治から昭和にかけての文学においてどのように取り入れられてきたか。その様相を文学史のなかに探ることで金融リテラシーの時代的推移を明らかにすることができると思った。

## 2. 研究の目的

### (1) 概要

1930年代の日本は、昭和金融恐慌、世界恐慌を経て戦時体制化する。この時期、文学の表象においても、金融経済・農村経済事象が題材として取り上げられた。従来、「経済小説」というジャンルは戦後に開花したと論じられてきたが、1930年代にはすでに胎動が見られる。また、不況・戦時体制下には「地方」「農村」の課題が社会問題化され文学の主要な題材となった。本研究では、文学研究と経済学研究の協働により、グローバル化した経済現象が文学の題材に浸透している様相への着目から、従来の文学史とは異なる表象の系譜を明らかにすることを目的とする。それによって、どのように「社会」が表象されたかを考究する。

### (2) 経済小説の萌芽

日本の近代文学は私的身辺的題材を表現することを中核に展開した。1920年代に入ると社会主義・共産主義の思想に促されてプロレタリア文学派が社会の変革を目的に、資本主義社会のもたらす階級分裂、社会的格差の現実相を表象した。プロレタリア文学に対抗した新感覚派や新興芸術派は主として都市風俗・文化という社会現象を斬新な手法によ

り表象することで旧来の文学手法との切断を図った。これが従来の文学史的な定説である。しかし、子細にこの時代の小説・評論等の諸言説をみたとき、世界市場、金融経済により世界規模で変動する社会的基盤に見合った、新しい文学の意義、題材・表象方法を模索する動きだったと捉えることができる。その動きは、総じて、文学理念・題材・表象方法・メディアの各水準における“文学の社会化”への志向だったと言える。

本研究は、その“社会化”の一側面として、経済現象を表象した小説の系譜をとりあげる。従来、「経済小説」というジャンルは戦後に開花したと論じられてきた。しかし、その社会的基盤となる第二次第三次産業の拡大、徒弟制商業から株式会社化した企業とその給与所得者層、都市中間層の拡大、都市文化・モダニズム文化が開花したのが1920～30年代である。第一次大戦後の不況から、昭和金融恐慌(1927)、世界恐慌(1929)を経るなかで、1930年代には、世界的に連動する産業・金融システムが社会変動の基盤にあるとの現実認識がひろがる。このとき、文学において経済現象を主題とした小説の胎動が見られる。本研究では、その内実を明らかにすることを目的とする。加えて、「経済小説」が啓蒙的な意義をになって発生してきた経緯とその内実から金融リテラシーの一般的な浸透の様相を明らかにする。

### (3) 地方・農村・植民地の表象

1931年の満洲事変以降、経済恐慌と連動して生じたブロック経済の構想、中国への軍事的進出、テロリズム、ナショナリズム、農村恐慌と社会不安が強まるなかで、地方・農村が文学的表象の主題となった。本研究では、経済恐慌から戦時下にかけての地方・農村の文学的表象を考究することをもう一つの課題とする。経済不況は地方・農村へと波及し深刻な問題となった。その打開策として満洲開拓移民が推進された。文学においても、そうした社会的動向が題材とされた。本研究では、恐慌・戦時下の農村と関連して「満洲」を表象したテキストまでを対象とし、「地方」「農村」「満洲」が経済・政治状況とともに、どのような意味をになって表象されたかを考究する。

## 3. 研究の方法

### (1) 1930年前後の経済変動を描いた小説の検討

伊藤永之介「恐慌」(1929)、久野豊彦『時局経済小説 人生特急』(1932)に書き込まれた当時の経済現象に関する文化史・経済史的な注釈的調査研究を通じて、「経済小説」としての2つの小説が、どの程度この時代の経済学的な水準を文学の表象として達成していたかを考究した。伊藤永之介「恐慌」は、1927年の昭和金融恐慌時の銀行をモデルとした小説であることが確認できる。久野豊彦

『人生特急』は1932年までに起きた銀行・株式相場の混乱と世相の種々相を題材として書き込んでいる。これらは、いずれも「経済小説」の萌芽的作品とみなしうる。伊藤は、『文芸戦線』の編集にもたずさわったプロレタリア文学派の作家の一人だった。一方、久野は慶応大学で経済学を修め、未来派・立体派などの欧米アヴァンギャルド芸術の影響下に文学活動に入った。その文学観は、プロレタリア文学派とは相容れず、萌芽期の近代経済学者ダグラスの経済学に着目することで対抗言説の論陣をはった。『人生特急』は、プロレタリア文学派批判とともに、自らの前衛的表現手法と訣別して新社会派を標榜した時期の作品である。伊藤と久野は、従来の文学史観からは対立的な立場にあったとみなされる。しかし、2つの小説は、むしろ経済変動にみまわれた社会を背景とする小説として近接性を指摘できる。文学の表象は、実際に起きた出来事をモデルとしても、必ずしも事実そのままではなく、あくまで「モデル」として表象されるが、この時代の経済動向、経済学の知見によって、これら小説が表象する経済現象の現実味を明らかにする。

#### (2) 「地方」「農村」「満洲」の表象

一方、1930年代には農村恐慌、満洲国建国後の満洲移民問題などが現れる。従来、30年代の地方・満洲にかかわる文学的営為は、農民文学懇話会、大陸開拓文学懇話会など、時の政治的意図とむすびついた国策従属的文学活動でしかないとみなされてきた。しかし、政治的強制とそれへの抵抗という枠組みだけでなく、生活実感と結びつく経済動向との関係から社会を表象したテキストとして捉え、その諸相を照らし出すことで、地方・農村の現実、想像的な「満洲」が、種々の葛藤を呈して表象されたことを考究する。島木健作は1930年代における「人間」の生き方のタイプを「地方」「農村」とのかかわりで描いた。この時代の東北・北海道、また満洲移民の生活実態を見聞にもとづいて描いた『満洲紀行』(1940)『地方生活』(1941)などの諸著作がある。島木のこうした文学的営為は、猪俣津南雄『窮乏の農村』(1932)との近接を指摘できる。1938年に、農民文学懇話会、大陸開拓文芸懇話会が設立された。それをきっかけに書かれた和田伝『大日向村』(1939)は、1930年代初頭、世界恐慌後の逼迫した農村経済について子細な描写を含み、農村の経済的逼迫を背景に満洲への移民があったことを描いた。『人生特急』には、戦時体制化が本格化する以前における株式相場・銀行にかかわる人物群が表象され、都市の視角から農村・地方経済との関係が描かれていたが、それに対して『大日向村』は、不況が深刻化し、戦時体制化が進んでいくなかでの農村の視角から、経済と満洲移民との関係を主題化した。両作品は1930年代の経済的・社会的動向の変化と、文学における地方表象との関

連を示した小説といえる。40年代には、丸山義二『庄内平野』(1940)、鶴田知也『北方の道』(1942)など、地方・農村・満洲を描いた文学テキスト群が現れる。グローバル化する経済の動向と、地方・農村・満洲を題材とした文学の出現とのつながりという観点に立つことで、1920年代におけるモダニズム文学の隆盛と、1930年代における地方・農村・満洲を表象したテキスト群とを関連づけて理解する文学史的展望を開く。

#### (3) 明治から昭和初期にかけての文学における金融リテラシー

一方、文学における経済の表象の系譜を考えるために、「経済小説」というカテゴリーの出現に即して具体的な小説テキストを取り上げながら、明治から昭和にかけての金融リテラシーの進展の度合を跡付ける。資本主義的な市場経済、銀行・生命保険等の金融業の出現、株式市場についての知識等が、明治以降の文学のなかでどのように描かれてきたかを手がかりに調査研究を行う。

#### 4. 研究成果

##### (1) 1930年前後における経済変動と文学

1930年前後における経済変動を題材とした文学に関する研究成果として、山崎義光「1930年前後における経済小説の萌芽プロレタリア文学派と新興芸術派との接近」(論文)を発表した。

1930年前後、日本の文壇では2つの文学流派が注目を集めた。プロレタリア文学派と新興芸術派である。従来、この2つは政治的前衛、芸術的前衛という対立する流派として別々に論じられてきた。しかし、1930年前後という同時代性、経済が社会にもたらす影響を小説のテーマとしている点に共通性がある。本稿は、そのような共通性の観点から、経済小説の萌芽を示した2つの作品をとりあげ、それらを起点に考察した。2つの作品とは、伊藤永之介「恐慌」(1929)と久野豊彦『人生特急』(1932)である。「恐慌」は1927年の昭和金融恐慌を題材とした。別々の銀行に勤める2人の兄弟の視座から、資本主義社会の金融機構を暴露した小説と評された。一方、久野豊彦は、マルクス主義に対する批判的な観点から、ケインズ以前のダグラス経済学に依拠することで、金融資本が資本家と労働者双方に支配的影響力をもたらすと考えていた。プロレタリア文学派と新興芸術派は、ともに1930年に「共同制作」小説を試みていた。共同制作は、複数の著者たちにより共同で構想・執筆する実験的な小説創作の方法だった。その試みのなかで扱われた題材が経済不況下の社会だった。共同制作という手法がとられたのは、経済変動によって深く影響される現在の社会を、複数の著者によって、より広い観点から多角的に描き出そうとしたことによる。久野の長篇『人生特急』はそうした試みの後に、「新社会派」の作品とし

て、「経済小説」と銘打たれて『時事新報』に連載された。この小説は興味深い結末で締めくくられていた。株式、銀行経営、工場経営で失敗した登場人物が地方農村に希望の場所を求める姿が描かれた。それには、資本主義の社会機構というレールを走る「特急」から下りて、自由な「人生」行路を見出すことは可能かという暗示と、その不可能性が読み取れる。それに対して、1939年には和田伝『大日向村』が現れる。1931～32年の急迫する農村不況の克明な描写とともに、その活路として満洲分村を描いた。プロレタリア文学派と新社会派は、肥大する都市中間層への対応の前に、前衛としての失調を余儀なくされた。経済小説の萌芽が現れた1930年前後は、20年代に隆盛した前衛と大衆の関係が、30年代の戦時体制下に国家と国民の関係へ置き換わる転回点にあたる。

## (2)地方・農村・満洲の表象

1930年代における地方・農村・満洲の表象に関するおもな成果として、高橋宏宣「伊藤永之介「万宝山」の周辺 一九三〇年代の満洲理解」(論文)、山崎義光「島木健作における「地方」表象」(学会発表)がある。

高橋「伊藤永之介「万宝山」の周辺 一九三〇年代の満洲理解」は、満洲事変前夜の満洲で起きた万宝山事件を題材とした伊藤永之介の小説「万宝山」(1929)を取り上げて論じた。同事件は、当時多くの報道がなされ、また中国、朝鮮の作家によって小説にも書かれた。伊藤「万宝山」は、当時の報道と比べたとき、事実には忠実であるよりも、日本・朝鮮・満洲の境界で翻弄される朝鮮人の寄る辺ない立場を強調するかたちで描いている。この小説は、満洲事変前において、農地をめぐる不安定な社会を表象していた。

山崎「島木健作における「地方」表象」は、1938～41年における島木健作の文学的営為を「地方」表象の観点から考究した。島木は香川県の農民組合運動にかかわったことで治安維持法により逮捕、入獄した。その後、文学活動に入った作家である。従来、典型的な転向作家として位置づけられてきた。しかし、島木はマルクス主義の政治・経済理論に依拠した社会運動から離れたとき、東北・北海道・満洲などの「地方」生活者の見聞にもとづいたエッセイや小説を発表する。こうした島木の文学的営為の眼目は、マルクス主義からも、国策追従からも距離をおいた、見聞にもとづくリアリズムにより「地方」を表象することにあつた。とくに本研究課題にかかわる論点は、満洲旅行にもとづいたエッセイ集『満洲紀行』(1940)や小説『或る小説家の手記』(1940)に、満洲開拓移民の生活がどのように成り立っているかを、その経済事情を含めて子細に取材したことに基づいて書かれていた点にある。

## (3)戦前期「経済小説」と金融リテラシー

明治から昭和初期にかけての文学における金融リテラシーに関する成果として、畔上秀人「戦前期経済小説の存在と日本人の金融リテラシー」(学会発表)がある。

小説が出版物である以上読者を獲得する目的を持つという前提に立てば、そこに記述される概念や用語が一般市民の知識を大きく超えることはないはずである。このことを利用し、経済小説を資料として一般市民の金融リテラシーを推量する試みを行った。その結果、保険のようになりに急速に一般市民へ浸透した金融商品がある一方、銀行経営者のモラルは未熟で、利用者も銀行システムを十分に理解していなかったことがわかった。そして、明治期以降の日本人の金融リテラシーは、金融商品や金融機関、リスクに対する認識といった区分において、多様な水準にあつたといえる。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 2件)

山崎義光、1930年前後における経済小説の萌芽 プロレタリア文学派と新興芸術派との接近、秋田大学教育文化学部紀要、査読無、72集、2017、51-60

高橋宏宣、伊藤永之介「万宝山」の周辺 一九三一年の満洲理解への一視座、福島工業高等専門学校研究紀要、査読無、57号、2016、147-156

[学会発表](計 5件)

畔上秀人、戦前期経済小説の存在と日本人の金融リテラシー、生活経済学会東北部会第22回研究大会、2016年11月19日、東北福祉大学ステーションキャンパス館(宮城県仙台市)

高橋宏宣、伊藤永之介「万宝山」の周辺 一九三〇年代の満洲理解、日本文芸研究会第68回研究発表大会、2016年6月11日、秋田県カレッジプラザ(秋田県秋田市)

山崎義光、島木健作における「地方」表象、日本近代文学会秋季大会、2015年10月25日、金沢大学角間キャンパス(石川県金沢市)

山崎義光、1930年前後における経済小説の萌芽 伊藤永之介「恐慌」と久野豊彦「人生特急」を視座に、日本文芸研究会2014年度第1回研究発表会、2014年10月18日、仙北市立角館樺細工伝承館(秋田県仙北市)

高橋宏宣、生家への愛とマルキシズム思想の共存 弘前高等学校時代の太宰治、2014

年 7 月 5 日、平成 26 年度日本近代文学会  
東北支部夏季大会、弘前大学（青森県弘前  
市）

6 . 研究組織

(1)研究代表者

山崎 義光 (YAMAZAKI, Yoshimitsu)  
秋田大学・教育文化学部・准教授  
研究者番号：10311044

(2)研究分担者

畔上 秀人 (AZEGAMI, Hideto)  
東洋学園大学・現代経営学部・教授  
研究者番号：90306241

高橋 宏宣 (TAKAHASHI, Hironobu)  
福島工業高等専門学校・一般教科・准教授  
研究者番号：90310987